

抗上皮成長因子受容体抗体薬に起因する皮膚障害の重篤化予測に関する研究

岩手医科大学薬学部 臨床薬学講座 臨床薬学分野/
岩手医科大学附属病院 薬剤部

高橋宏彰

Hiroaki Takahashi

この度は、日本医療薬学会 2024 年度 Postdoctoral Award という名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。ご指導いただいた先生方並びに日本医療薬学会の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、このような執筆する機会をいただいたことを大変嬉しく思います。

私は、2003 年 3 月に東北薬科大学薬学部薬学科を卒業、2005 年 3 月に東北薬科大学大学院 博士課程前期課程を修了し、2005 年 4 月から岩手医科大学附属病院薬剤部で薬剤師として勤務しております。大学院では、脊髄疼痛伝達機構における内因性オピオイドペプチドの役割を解明するために、マウスを用いた行動薬理的な研究を行っていました。このように痛みに関する研究を行っていた経験から、私は痛みで苦しんでいるがん患者の苦痛を軽減したいとの思いがあり、大学院修了後は大学病院に就職しました。病院薬剤師業務では、これまでに調剤、製剤、がん化学療法、医薬品管理、薬剤管理指導、治療薬物モニタリング、治験等の業務に従事してきました。薬剤管理指導では、主にがん患者に対する服薬指導を担当し、疼痛状況に応じた投与量調節や他剤への切り替え方法等の提案やがん薬物治療による副作用対策のための処方提案等を行っていました。

研究では、臨床で問題となっている題材を研究テーマとして臨床研究を行ってきました。私は化学療法センターでがん患者に対して服薬指導を

行っていた際に、上皮成長因子受容体（epidermal growth factor receptor: EGFR）を標的とする抗 EGFR 抗体薬によるがん薬物治療を受けた患者の中で、皮膚障害が重篤化して治療を継続できなくなる方がいました。また、女性患者や対人関係の仕事をしている患者の中には、抗 EGFR 抗体薬による皮膚障害に対する不安が強く、治療を変更せざるを得ない方がいました。このような患者と遭遇したことが本研究を行うきっかけであり、皮膚障害が重篤となる患者を予測することで重篤化を回避することはできないかと考え、本研究テーマである「抗上皮成長因子受容体抗体薬に起因する皮膚障害の重篤化予測に関する研究」を開始しました。私は、他の研究で貼付剤の経皮吸収性を検討するために経皮水分蒸散量（transepidermal water loss: TEWL）の測定を行っていましたが、TEWL が皮膚バリア機能の指標としても使用されることに着目し、TEWL が抗 EGFR 抗体薬による皮膚障害のコントロールマーカーとして使用できるのではないかと考え、前向き観察研究を計画し、研究を行いました。また、前向き観察研究では症例集積までに時間がかかるため、同時に、抗 EGFR 抗体薬による皮膚障害のリスク因子に関する後ろ向き観察研究やそのリスク因子が生存率に及ぼす影響に関する後ろ向き観察研究についても計画し、研究を行いました。

私は 2019 年 4 月から岩手医科大学薬学部 臨床

薬学講座 臨床薬剤学分野の所属となりましたが、附属病院薬剤部も兼務していたため、臨床研究を継続して行いました。大学では、学生が臨床研究に興味を持ち、将来、臨床現場で活躍できる薬剤師になってもらえればと考え、私が担当する学生には前向き観察研究で患者から同意を取得したり、TEWLの測定を行う際に一緒に同席してもらう等、臨床研究を経験する機会をなるべく設けるようにしました。その後も臨床研究を進め、最終的には臨床研究の結果を3報の英語論文として発表し、私の所属している岩手医科大学薬学部で論文提出による博士（薬学）の学位申請を行い、学

位を取得することができました。

今後も、臨床で問題となっている題材を研究テーマとして臨床研究に取り組み、患者QOLの向上や薬物療法の質の向上等、医療薬学の発展に貢献できればと考えております。

最後になりましたが、本研究を行うにあたり多大なるご指導・ご鞭撻を賜りました工藤賢三先生（岩手医科大学薬学部 臨床薬学講座 臨床薬剤学分野教授 / 岩手医科大学附属病院 薬剤部 薬剤部長）、並びに附属病院薬剤部や化学療法センターの皆様 に深く御礼申し上げます。